

# ヒラメ装着標識の効果について

西 田 輝 己

当才魚のヒラメ標識放流における各標識の有効率を調べた。

## 調 査 方 法

前記「ヒラメ採集および飼育によるヘイ死数について」により採集飼育したヒラメ当才魚を用い、S48年7月10日より9月7日迄60日間飼育観察をおこなった。

標識は図1のような黄色アンカータグ、白色極小タグ、つりばり、青色迷子板、赤色迷子板、帯金を背ビレ基部に、その他には無眼側にマジックで印す方法、有眼側にスプレーフリーザーを吹きつける方法を用い、各20尾(スプレーは5尾)に標識付けをおこない1t塩ビ水槽にて、アイベット20ppm30分水溶の後、流水で飼育し標識の離脱ヘイ死を観察した。なお、水槽は黒色斜光材でおよい投餌は100g~150gを隔日にやり残餌のないようにした。

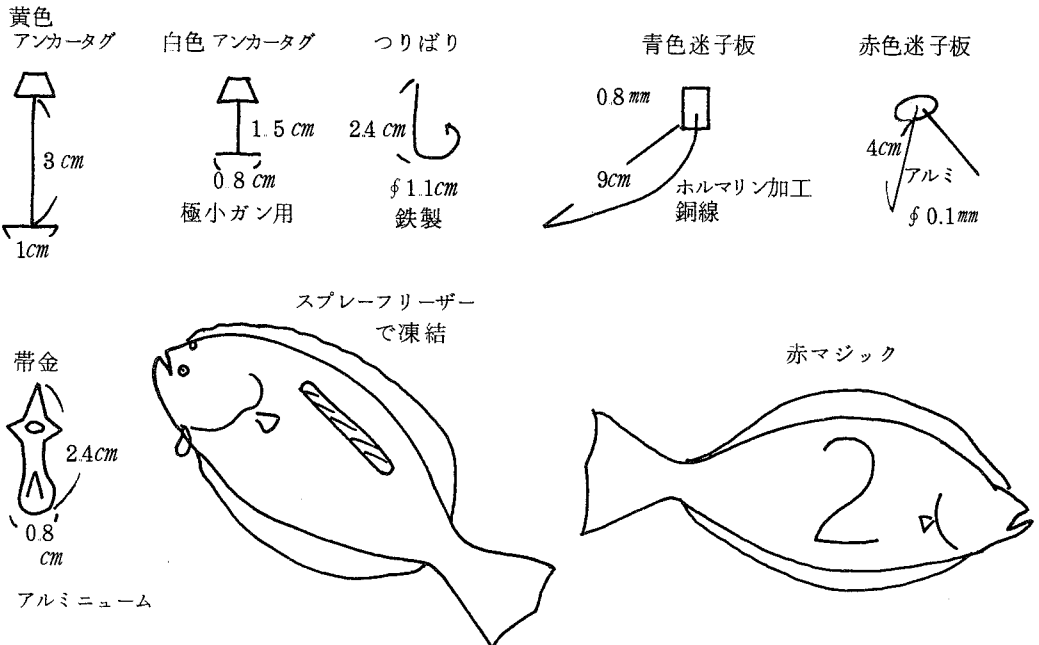


図1 標識図

## 結 果 と 考 察

表1は供試魚体が生きて標識を付けていた率で有効率のことである。60日間魚体に着いたまゝの標識はアンカータグ2種、帯金、青色迷子札でこれらの中でも白色アンカーが特に魚体に影響を与えることが少なく当才のヒラメに適しているようである。

飼育実験中標識の離脱、ヘイ死が有効率を下げたのであるがおおのこの標識離脱率は白ガン0%、黄ガン16%、帯金33%、青色迷子板35%、赤色迷子板80%、つりばり95%で、アンカータグ2種を除いて他の標識は離脱による有効率低下をまねいている。

マジック標識は2日目に2尾、3日目に1尾のヘイ死を見たがその後は標識確認ができなくなった。同様にスプレーフリーザー方式による皮フ凍結も試みたが有眼側面積の約 $\frac{1}{3}$ 凍結では5尾の供試魚全てが凍結部位が赤くただれ2~5日で死に、約 $\frac{1}{10}$ 凍結では5尾中2尾が2~3日で死に生き残った個体も8~10日で凍傷がなおり15日位で他の部位とあまり区別がつかなくなった。

表2は標識魚体の実験開始時と終了時の平均体長、体重およびその差を出しているが、池内で飼育する場合大きな個体は小さな魚体より大きくなり、標識の種類、表1の有効率とは関係ないように思われた。

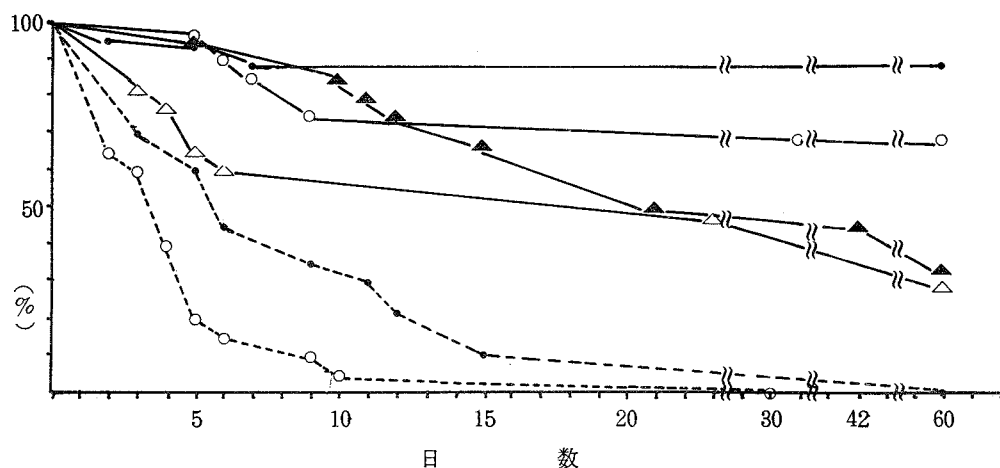


表1 標識魚残存率表

表2 標識魚平均体重、体長表

標識の種類	実験開始時の		実験終了時の		実験中に増えた	
	平均体長	平均体重	平均体長	平均体重	平均体長	平均体重
帯 金	11.68cm	165g	14.34	298	2.66	13.3
黄色タグ	10.66	132	13.22	252	2.56	12.0
青色迷子板	10.56	114	12.22	208	1.66	9.4
白色タグ	9.99	97	11.21	155	1.22	5.8